

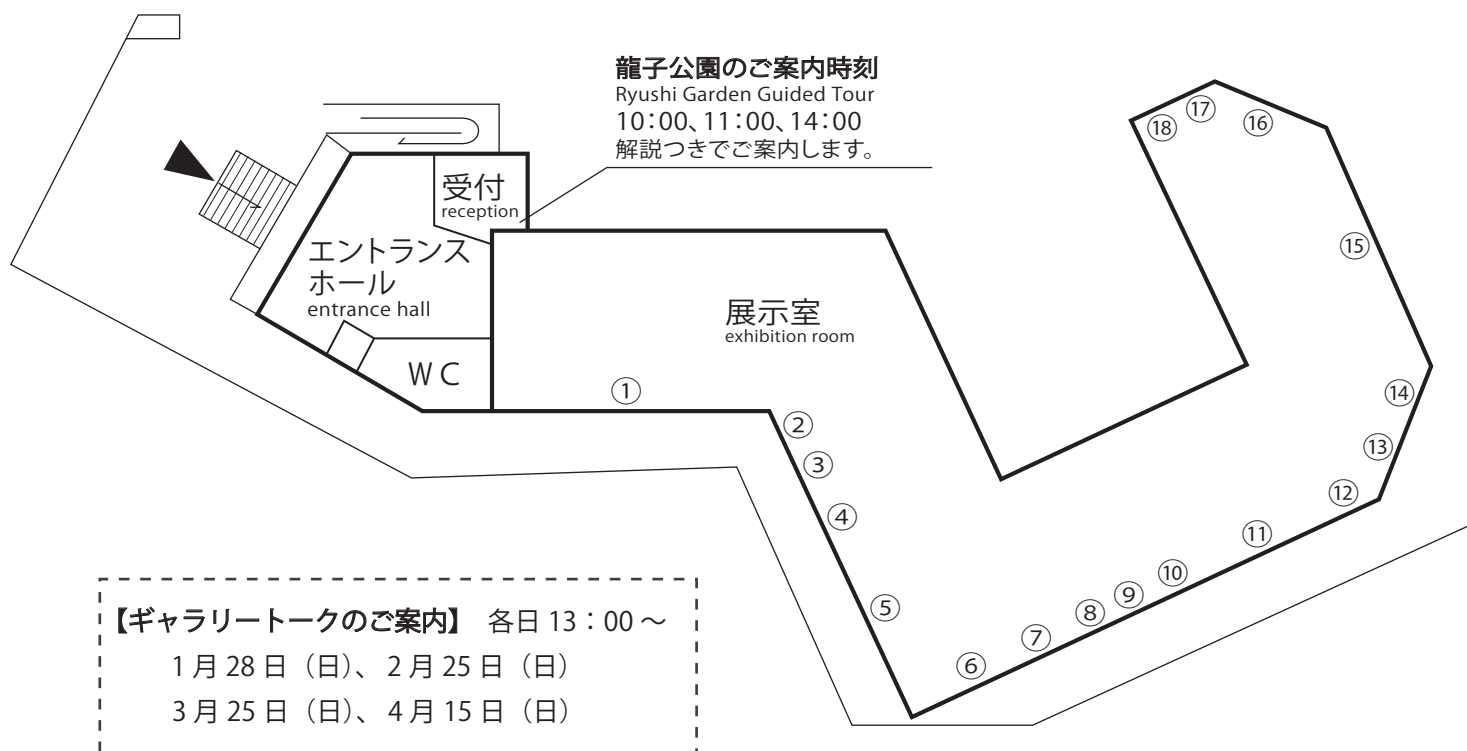
# 大田区立龍子記念館

名作展「鳥獣百科 龍子の描いた生きものたち」

平成29年12月23日(土)～平成30年4月15日(日)

## Ryushi Memorial Museum

Ryushi Kawabata Exhibition "Various Animals in his Works"  
December 23, 2017 – April 15, 2018



### 展示作品

作品名	Title	制作年/年齢	サイズ(縦×横)	形状	出品展
<b>展示コーナー1 酉年から戌年へ</b>					
①「海鷗」	Sea Cormorants	1963年(78才)	245.4×727.2cm	紙本彩色 額装・六枚一面	第35回青龍展
②「河童腕白図」	Naughty Kappa	1955年(70才)	154.5×73.3cm	紙本彩色・額	第23回春の青龍展
③「春池」	Plum Blossoms and Bush Warblers	1944年(59才)	147.3×69.9cm	絹本彩色・額	第12回春の青龍展
④「請雨曼荼羅」	Praying-for-Rain Mandala	1929年(44才)	227.3×172.1cm	絹本彩色・額	第1回青龍展
⑤「やすらい」	Peace and Beatitude	1958年(73才)	242.0×728.0cm	紙本彩色 額装・六枚一面	青龍社創立30周年 記念展
⑥「使徒所行讃」	Homages to the Goblin Disciples of En-no-Ozunu	1926年(41才)	229.0×506.0cm	絹本彩色 額装・三枚一面	再興第13回院展
⑦「秋縁」	Veranda in Autumn	1947年(62才)	249.0×146.5cm	紙本彩色・額	第19回青龍展
⑧「立秋」	Autumn Begins	1932年(47才)	172.1×226.0cm	絹本彩色・額	第4回青龍展
<b>展示コーナー2 生きもののユーモラスな表情</b>					
⑨「眠猫」	Sleeping Cat of Nikko Toshogu Shrine	1933年(48才)	66.5×85.8cm	絹本彩色・軸	第3回個展 <日光に題す>
⑩「三申図」	Three Wise Monkeys of Nikko Toshogu Shrine	1955年(70才)	47.0×72.9cm	紙本彩色・額	第5回連作奥の細道 点描展

# 大田区立龍子記念館 Ryushi Memorial Museum

名作展「鳥獣百科」平成29年12月23日(土)～平成30年4月15日(日)

Ryushi Kawabata Exhibition "Various Animals in his Works" December 23, 2017 - April 15, 2018

作品名	Title	制作年/年齢	サイズ(縦×横)	形状	出品展
⑪「孫悟空」	Sun Wuk'ung, Monkey with Divine Power	1962年(77才)	243.0×728.0cm	紙本彩色 額装・六枚一面	第34回青龍展
⑫「千里虎」	Tiger goes over a thousand miles	1937年(52才)	50.4×58.7cm	紙本彩色・軸	
⑬「百子図」	Children Playing with an Elephant	1949年(64才)	直径172.0cm	紙本彩色・額	第9回青々会展
⑭「獺祭」	Otter's Feast	1949年(64才)	154.5×245.0cm	紙本彩色・額	第21回青龍展

## 展示コーナー3 「龍」にちなんだ作品群

⑯「渦潮」	Whirlpools	1956年(71才)	241.0×725.0cm	紙本彩色 額装・六枚一面	第28回青龍展
⑰「龍巻」	Giant Waterspout	1933年(48才)	293.0×355.0cm	絹本彩色 額装・二枚一面	第5回青龍展
⑱「水巴」	Shifting Wave Patterns	1950年(65才)	142.4×76.2cm	紙本彩色・額	第18回春の青龍展
⑲「龍宮」	the Sea God's Palace	1963年(78才)	48.5×72.1cm	紙本彩色・額	

ほか展示作品関連資料18点 計36点

## 展示解説

### ■龍子作品の生きものたちが見せる多彩な表情

花鳥画は東洋画題の一つで、日本では中国の影響を受け、平安時代頃から描き始められ、桃山時代から江戸時代に隆盛した。草花や鳥のみを描いた作品だけでなく動物や虫、魚を配した図も花鳥画に含まれ、装飾性だけでなく、吉祥をはじめ様々な寓意を含めて描かれることが多い。龍子は、「現代人の花鳥画は既往の夫々の時代とは自ら別個に誕生するものであることに期待するが故に、古典を云ふ以上に、現代人は現代の生活意識に生きるべきことを強調したい」と述べ（『古典と自分』『塔影』1938年1月）、古典的なテーマである「花鳥画」についても現代性を反映させていくべきだという考えを示している。それは「花鳥画」だけにとどまらず、本展出品の作品群も同様で、生きものが見せる多彩な表情とともにその背景にある時代性に注目して鑑賞してほしい。

### ■川端龍子「犬のノミ」(東京朝日新聞掲載)と《立秋》

龍子の画業を見ていくと、猫が描かれることは稀で、一貫して「犬派」だったことがうかがえる。30代初めに制作された木版画《第一日》(1915年、本展出品)には当時の飼い犬が登場する。また、美術団体・青龍社を設立した40代の時には『東京朝日新聞』(1931年8月22日～24日掲載)には、「犬のノミ」と題した随筆を書いてもいる。その中で龍子は、忙しい制作の合間に、画笔を置いて爪を武器にして、愛犬のノミとりに熱中したエピソードを紹介している。随筆には、「ムク」という愛犬が登場し、特徴は「セッターの雑種で、長い毛並みは赤に白いぶちがある」と述べられている。「犬のノミ」掲載の翌年に描かれた本展出品《立秋》を見てみると、長い毛並みに赤毛という特徴から、この犬がムクではないかと考えられる。《立秋》に描かれたような庭の藪の中で、元気いっぱい遊んだムクが、アトリエに向かって龍子にノミとりを催促している光景を想像すると、この作品に込められた龍子の優しいまなざしを感じとることができる。

## 次回展予告

### ■名作展「ベストセレクション 龍子作品の逸品(仮称)」

4月28日(土)～8月26日(日)

濃紺の絹地に金彩で仕上げた渾身の一作《草の実》(1931年)や爆風に飛び散る庭の植物をドラマチックに描いた《爆弾散華》(1945年)など、当館の人気作品を中心とした展覧会です。